

美の道行

24 青柳 恵介

大津絵「鬼の念仏」

していることだろう。そして、その闊達な絵が人生の幸せまで感じさせてくれるのではないか。心こぼれた人も初期の大津絵を眺めれば、無意識に笑顔が浮かぶ。こんな幸福な美術は他にない、と言いたいくらいだ。ここに紹介したのは愛知県豊田市民芸館の「鬼の念仏」だが、これも浜松市美術館蔵の大津絵に劣らない古い時代のものである。

藤娘やら座頭やら弁慶やら、様々な題材で、版画を刷るよりももっと早く安直に制作できる方法を駆使して、大量に描かれた民画である。懐の淋しい旅人でも気楽に買える値段であったろう。初期大津絵には風刺の精神が横溢している、と指摘したのは柳宗悦である。奉加帳を持って鉦を首にぶら下げていけるけれど、なんだ実際は角が一本折れた鬼ではないか、ユーモラスに偽善者を風刺する。いつのころからか、大津絵には効能が付加された。雷除けであるとか、良縁が授かるとかいう類いの効能である。「鬼の念仏」は子供の夜泣きをおさめる効能があると書いて売られたらしい。工芸品の美術性を指摘する

人は多いが、美術品の工芸性を指摘する人は少ない、と述べたのも柳宗悦だ。大津絵が人に親近感を抱かせ、それを楽しいものにし、何よりそれを美しいものにしてしているのは絵の工芸性だ、と柳は言う。同じものを素早く大量に描くことによって、無駄な筆の運びがなくなり、もしかすると複数の人が分担で流れ作業のように制作することによって要らぬ個性も消滅する。それら

うな時代になると、便利と引き換えに日本人の生活の色は乱れ、醜い色が横溢してしまっただけで、それを嘆いても詮のない話であるけれども、江戸時代の貧しい美しさから、これからの美術のありように何の示唆も受けないならば、それはいつそ情けない話である。豊橋市美術館では大津絵の鬼を、若い美美女のアップルが仲良く眺め、互いの感想を述べているのだから、一言二言ささやきあっていい。私にはその光景も実に好ましいものとして眺められた。日曜日のデートに美術館を訪れ、日本の過去の文化に浸って楽しんで。二年間にわたって「美の道行」を連載させていたのだが、若い人にこそ「美の道行」(ちよつと気障な言葉だが)を試みてもらいたいと私は切に願う。(古美術評論家)

今、愛知県の豊橋市美術博物館で開催中の「鬼・オニ・ONI展」という展覧は、とても興味深い企画展である。三河地方の花祭りなどの民間信仰の紹介もあり、古代の力強い鬼瓦や仏画に描かれた鬼も展示され、普通「鬼は外」と豆をまかれて退散する鬼が、一方で、私たちの暮らしの深いところに蟠踞していることに気付かされる素敵な展覧だ。

表として展示されているのが、大津絵に描かれた鬼だ。「鬼の念仏」「鬼の三味線」「鬼の行水」の三幅(浜松市美術館蔵)が展示され、人々の目を和ませていた。大津絵好きな私は、うれしかった。大津絵の鬼は何といきいきと

幸を振りまく闊達な

工芸性と柳は呼ぶのである。

ユーモラスで、気取らない絵の持ち味が魅力の「鬼の念仏」



古い大津絵の絵の具の美しさも指摘したい。貧しい家で使用した木綿の布団布の染めの色が美しいように、あるいは、伊万里のくわんか手のもっとも庶民的な染め付けの具須の色が美しいように、大津絵の絵の具の色は美しい。化学薬品が輸入され、国内でもそれを作ることができるよ

「美の道行」は今回で終わります。次回からは、狩野博幸同志社大教授の「怒濤―江戸の絵師列伝を連載します。